令和二年度　入学試験問題　国　語

文・教・経・医—医　二月二十六日（水）一四・一〇—一五・五五

理（一のみ）　一四・一〇—一四・五五

注意事項

1、試験開始の合図まで、この冊子と答案紙を開いてはいけない。
2、問題冊子のページ数は十二ページである。
3、問題冊子とは別に、答案冊子中の答案紙が文学部・教育学部・経済学部・医学部医学科志望者には三枚、理学部志望者には一枚ある。
4、落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所などがあったら、ただちに申し出よ。
5、理学部志望者は、一のみを解答せよ。
6、文学部・教育学部・経済学部・医学部医学科志望者は、解答にかかる前に答案紙上部の折り目をていねいに切り離し、それぞれ、所定の二箇所に受験番号を記入せよ。
7、理学部志望者は、答案紙の所定の二箇所に受験番号を記入せよ。
8、解答は答案紙の所定の欄に記入せよ。所定の欄以外に書いた解答は無効である。
9、問題冊子の余白は草稿用に使用してもよい。
10、試験終了後、退室の許可があるまでは、退室してはいけない。
11、答案紙は持ち帰ってはいけない。問題冊子は持ち帰ってもよい。

一

次の文章は、「歴史社会学」という新しい学問分野を掲げる立場から述べられたものである。これを読んで、後の問に答えよ。

人はおそらく他の人々について自分自身に当てはめてしか理解することができない。歴史上の英雄やドクサイ[a]者、絶対権力者を語る時、人々はしばしばそんな立場に立った自分自身について想像しようとする。そして、自分自身との距離によって「偉大」だとか「天才」だとか「空前絶後」だとかいった形容を当てはめる。また、志半ばで挫折[b]した人物については、自分自身が失敗を味わった時からの類推で心中を察しようとする。しかし、それらはどれも人々が自分のこととして理解しようとする過程で考えることである。

イデオロギーの問題も、人々が自分に当てはめて考えた場合に理解しやすい考え方に惹[c]き付けられているともいえる。古くから、様々な職場を経験して生きてきた人々（いわゆる「叩き上げ」の人々）は、人間の適性が千差万別でそれぞれが多様な役割を果たしている社会を思い浮かべやすい。これに対して、ごく均質な制度や組織の中だけで生きてきた人々は、しばしば均質な人員からなる組織として社会を考える。

言語の世界でしばしば登場する「自由」や「平等」といった万人受けする言葉も、それぞれの人々の経験や人間関係、社会に対する考え方によって、①まったく別物に解される。人間の適性が均質だと考える人々と、千差万別だと考える人々とでは、同じ「平等」でも意味が違う。人間の適性が多様だと考える人々は、多様な適性や能力に応じた機会の平等をすぐに思い浮かべるが、人間は均質と信じる人々は誰もが同じような「成果」や「待遇」や「幸せ」を得られる結果の平等を思い浮かべることが多い。このため、政治思想や社会思想、そしてイデオロギーをめぐる議論は、お互いに別の「人間」や「社会」を思い浮かべつつ平行線をたどっていくことが多いのである。

そして、権力をめぐる語り方も各々別物になっていく。人間は均質だと考える人々は、均質なレンガのような人々を合理的に積み重ねて大きな建築物を建設するといった形の権力を思い浮かべやすい。そして社会とは大きいほど偉大で優れていると考え、膨大な人員からなる組織や、巨大な国家――「大国」――こそが優れていると考える。これに対して、人間は多様だと考

える人々は、その場その場、その瞬間その瞬間に生じる関係こそが社会であり、各々の関係を個別に調停するのが権力だと考えることが多い。巨大な組織や、国家というのを否定するわけではないが、個々の現場で日々作り出されている関係の方がより具体的で身近だと考える。

人間は均質だと考える人々と多様だと考える人々の間の違いは、人々が作り出している権力関係そのものについても対照的な考えを生む。簡単にいえば、複雑で多様な関係を考えに入れて全体について見渡す場合と、単純で均一な関係に基づいて全体を構成する場合の違いである。

複雑な対象を取り扱う場合は、それほど大きな関係性は想像しにくい。個別の構成要素自体が複雑なので、それらが作り出すさらに一層複雑な関係について考えることは難しい。これに対して、単純で均質なブロックのような人間関係を考える場合、延々と均質に展開する巨大な組織について考えることは難しくない。

そして、多くの人々が、巨大組織が必要とする均質な人間像を、「人間は平等である」という近代の思想と同一視、あるいは混同するようになってしまう。「平等」は、「均質」ということに変換され、多くの人々が均質な部品であると見なされるようになる。そして、均質な部品であるならば、どれも同じなのですぐにでも取り替え可能であるという考えが強くなる。「人間は平等である」という考えは、実は人間を単なる数字、取り替え可能な部品であると見なす思想と表裏一体なのである。

取り替え可能な部品ならば、[d]消耗しても換えがある。人間は本来それぞれ多様で、かけがえのない存在であるはずなのだが、「人間は平等である」と考えることでどれも同じ均質な「部品」に変換されてしまう。言い換えれば、「人間は平等である」と進んで考えることは、自ら換えはいくらでもある部品であることを志向することなのである。そして、自ら部品を志向する人々は、最も非情な取り扱いを受けることになる。換えはいくらでもある部品は単なる消耗品であって、個別に取り替えても、捨てても、大きな全体(メカニズム)にとっては大した問題ではないからである。

そして消耗部品として捨てられた人々は、自ら求めた巨大組織の構成部品としてその役割を終える。最大の問題は、そのような目に遭う人々が実は自らそれを望んでいるように見えてしまうことである。そこで最大の役割を果たすのも、「人間は平

等である」という考えで、人々はまわりの多くの人々と同じように「平等」な「人間」になろうとする。そして、誰もが同じで、誰もが同じ扱いを受ける。誰もが同じなのだから、何らかの理由で消耗したならば取り替えられて、捨てられる。

歴史を視野に入れながらこれまでの社会科学を考えると、たとえば「人間は平等である」のような命題が、以前の思想家が考えたのとは別の意味になり、しかも以前にはなかった問題を引き起こしている様子が観察できる。本来個性的で、あらゆる意味で「平等」ではない人間は、平等ではないからこそ、それぞれの適性を発揮することができる。それを無理やり平板化し、平均化しようとする視点は、人々を「平等」に隷属化[e]する発想と直接結び付いてしまう。

このことは、権力やイデオロギーの問題から一旦目を移して、教育の問題などを考えればわかりやすい。「平等」を掲げる教育は、あらゆる人々を同一の基準で評価しようとし、競争させることによって、まるで量産品のような人員を作り出してしまう。もちろん、この種の議論は教育をめぐって批判的な立場の人々が古くから何度も繰り返してきたことである。

もちろん「平等」を声高[f]に強調してきた社会科学全体を否定する必要はないが、②社会科学が持っている両義性、二面性を理解することは必要だろう。一方で、問題の所在を指摘してその対策を暗示しながら、同時に新たな問題を自ら作り出している。しかも、状況を悪化させてすらいる。そして、そのような両義性や二面性は、歴史的に考えると立体的に見えてくる。一八世紀のヨーロッパにあっては「解放」の論理であった言説が、二一世紀の「グローバル化」にあっては人間のキカク化[g]、均質化、そして隷属化の論理ともなりうる。

問題はおそらく特定の視点、特定の価値観からのみ「社会」のあらゆる問題を明らかにしようとする思考にあるのだろう。社会科学は、常にほかにもありうる可能性の中から常に選び取っていく知のイトナみ[h]でなければならない。それが不可能ならば、特定の価値や観点を作り出した人々にとって有利で、その他の人々にとって不利な状況を生み出すことになる。このことは、まさに過去の社会、今日の人々と直接の利害関係が少ない社会を考えると際立ってくる。

歴史社会学は過去の価値観の中でセイイッパイ[i]生きていた人々の社会を考えることで、現在の価値観の中で生きる人々の特性を明らかにしようとする。現代人は、自分たちが特別な存在であると考えがちであるが、歴史は過去の「現代人」もそうであ

ったと教える。人々は自分だけが特別であると考えながら、実際には他の人々と変わらない生き方をしようと願っている。そんな矛盾した命題を掲げながら毎日を送っている。

このように考えるならば、歴史社会学が社会学全般に対して大きな貢献を果たすことが期待できる。それは、近代社会、現代社会の似姿として分業化、細分化、類型化、均質化した人間像――巨大な機械の部品としての人間――に対し、それが生まれる前の社会、あるいは別の形で分業化していた社会の人間像を対置することである。言い換えると、現代に至るまで巨大な組織が主人公としてふるまい、③組織を構成する人間は均質な部品としてふるまおうとしてきた。あるいはそうふるまうことを求められてきた。しかも、そんな現代社会を解釈する社会科学が、結果として巨大な機械の部品としての人間を積極的に推奨してきた。現に、社会科学はそれを学べば学ぶほど自分自身を部品――④誇らしい呼称としての「個人」――として適応しようとする人々を生み出す。そんな社会科学に対して、歴史に学ぶことによって修正を求めるのが、まさに歴史社会学なのである。歴史社会学は歴史学とは異なって社会科学のあり方について多く学んでいる。まさにこのことこそが、歴史学と社会学の中間にある歴史社会学の利点なのである。

過去の社会についての理解は、刻々と変化していく状況を通して、実は不変の人間社会を理解することでもある。歴史家が毎度強調するように、過去の人間を理解するには、現代を生きる自分自身の立場に引き寄せて理解するほかはない。技術が発達し、[j]エイヨウ状態や衛生状態ほか、生活の水準が変化しても、人間の考え方や感じ方はそれほど変化しているわけではないからである。

（犬飼裕一『歴史にこだわる社会学』より）

【注】 ○社会科学……社会現象を対象とする学問分野の総称。経済学、法律学、政治学、社会学など。

問一　傍線部a～jのカタカナは漢字に、漢字は読みをカタカナに、それぞれ改めよ。

問二　傍線部①「まったく別物に解される」とはどういうことか。以下の設問(1)(2)に即し、A・B二つの立場にわけて整理せよ（A・Bは順不同）。

(1)　「まったく別物」の捉え方はどのような人々の間で生じると筆者は考えているか。解答欄に合わせて、対をなす適切な表現を、A・Bそれぞれ九字で本文から抜き出せ。

(2)　二つの異なる立場A・Bにおいて、「社会」と「権力」はどのように捉えられると筆者は考えているか。本文に即して、A・Bそれぞれ六〇字以内で説明せよ（句読点・かっこ類も字数に含める）。

問三　傍線部②について、以下の問に答えよ。

(1)　傍線部②は、社会科学のどのような有り様を指しているか。「平等」という考え方の場合について、本文に即して一二〇字以内で具体的に説明せよ（句読点・かっこ類も字数に含める）。

(2)　筆者は、社会科学が抱える問題の要点がどこにあると考えているか。それを示す最も適切な四〇字の箇所を本文から見出し、その最初と最後の五文字を答えよ（句読点・かっこ類も字数に含める）。

問四　傍線部③について、筆者は、なぜ人々がそのようにふるまおうとすると考えているか。本文に即して七〇字以内で説明せよ（句読点・かっこ類も字数に含める）。

問五　傍線部④について、なぜ筆者は「個人」について「誇らしい呼称」と表現したのか。その理由として最も適切なものを、次のア～エから一つ選べ。

ア　近代・現代における個々の人間は、均質的であるからこそ平等だという社会科学の理想を示すため。

イ　部品として捨てられる人々に対して、自分だけが特別な存在であると錯覚させる社会科学に皮肉を示すため。

ウ　人々が、巨大な組織を構成する部品としての誇りを持って懸命に生きていることに賞賛を示すため。

エ　時代が変わり生活水準が変化しても、人間の感じ方や考え方はそれほど変化していないという矛盾を示すため。

二　次の文章は『和泉式部日記』の一節である。文中、「女」とあるのは和泉式部、「宮」は「女」の恋人である帥宮（そちのみや）のことである。宮は、女が他の男性を通わせているのではないかと疑念を抱いており、訪れが途絶えがちになっている。これを読んで、後の問に答えよ。

かくて、のちもなほ間遠なり。月の明かき夜、うち臥して、「うらやましくも」などながめらるれば、宮に聞こゆ。

月を見て荒れたる宿にながむとは見に［　①　］ぬまでも誰に告げよと

樋洗童（ひすましわらは）して、「右近の尉（じょう）にさし取らせて［　②　］」とてやる。御前に人々して、御物語しておはしますほどなりけり。人まかでなどして、右近の尉さし出でたれば、「例の車に装束せさせよ」とて、おはします。

女は、まだ端に月ながめてゐたるほどに、人の入り［　③　］ば、簾（すだれ）うちおろしてゐたれば、例のたびごとに目馴れてもあらぬ御姿にて、御直衣（なほし）などのいたうなえたるしも、A をかしう見ゆ。ものものたまはで、ただ御扇に文を置きて、「御使の取らで参りにければ」とて、さし出でさせたまへり。女、もの聞こえむにもほど遠くてびんなければ、扇をさし出でて取りつ。宮も上（のぼ）りなむと思したり。前栽のをかしき中に歩かせたまひて、「人は草葉の露なれや」などのたまふ。いとなまめかし。近う寄らせたまひて、「ア今宵はまかりなむよ。誰に忍びつるぞと、見あらはさむとてなむ。明日は物忌と言ひつれば、なからむもあやしと思ひてなむ」とて帰らせたまへば、

（Ⅰ）こころみに雨も降らなむ宿過ぎて空行く月の影やとまると

人の言ふほどよりも児（こ）めきて、あはれに思さる。「あが君や」とて、しばし上らせたまひて、出でさせたまふとて、

（Ⅱ）あぢきなく雲居の月にさそはれて影こそ出づれ心やは行く

とて、帰らせたまひぬるのち、ありつる御文見れば、

われゆゑに月をながむと告げつればまことかと見に出でて［　④　］にけり

とぞある。「なほいとをかしうもおはしけるかな。イいかで、いとあやしきものに聞こし召したるを、聞こし召し直されにしが

な」と思ふ。

宮も、言ふかひなからず、つれづれの慰めにとは思すに、ある人々聞こゆるやう、「このごろは、源少将なむいますなる。昼もいますなり」と言へば、また、「治部卿もおはすなるは」など、口々聞こゆれば、B いとあはあはしう思されて、久しう御文もなし。

【注】○うらやましくも――「かくばかり経がたく見ゆる世の中にうらやましくもすめる月かな」（拾遺集・雑上・藤原高光）による。　○樋洗童――女に仕える童女。　○右近の尉――宮の従者。　○上りなむ――女の部屋にあがろう。○人は草葉の露なれや――「わが思ふ人は草葉の露なれやかくれば袖のまづそほつらむ」（拾遺集・恋二・詠み人知らず）による。　○物忌――方角やけがれを忌んで家にこもること。　○児めきて――子供っぽい。おっとりしている。

問一　空欄①～④には、いずれも動詞「来」の活用形が入る。最もふさわしい活用形を、ひらがなで記せ。

問二　傍線部ア・イを、適宜言葉を補って、わかりやすく現代語訳せよ。

問三　二重傍線部A・Bについて、誰のどのような心情であるか、わかりやすく説明せよ。

問四　和歌（Ⅰ）・（Ⅱ）を、適宜言葉を補って、わかりやすく現代語訳せよ。

三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。但し設問の関係で送り仮名を省いた部分がある。

陶通明詩云、山中何所有、嶺上多白雲。只可自怡悦、不堪持贈君。雲固非可持贈之物也。

坡翁一日還自山中、見雲気如群馬奔突自山中来。遂以手掇、開籠、収於其中。及帰、白雲盈籠、開而放之、遂作攫雲篇云、道逢南山雲、欻吸如電過。竟誰使令之、袞袞従空下。又云、或飛入吾車、偪仄人肘胯。搏取置笥中、提携反茅舎。開緘仍放之、掣去仍変化。然則雲真可以持贈矣。

宣和中、艮嶽初成、令近山多造油絹囊、以水湿之、暁張於絶巘危巒之間。既而雲尽入、遂括囊以献、名曰貢雲。毎車駕所臨、則尽縦之、須臾、滃然充塞、如在千巖万壑間。然則不特

可二以持贈一、又可二以貢一矣。併資二一笑一。[6]

（周密『斉東野語』による）

【語注】○陶通明――陶弘景。字は通明。南朝梁の人。　○怡悦――楽しむこと。
○坡翁――蘇軾。号は東坡。宋の人。　○攄雲――雲を取ること。　○欻吸――迫ること。
○袞袞――続いて絶え間のないさま。　○偪仄――迫ること。　○肘胯――ひじと、またぐら。
○搏取――捕まえること。　○緘――箱などにかける縄。　○宣和――宋の徽宗のときの年号。
○艮嶽――山の名。徽宗が名づけた。　○油絹囊――油で防水した絹の袋。　○絶巘危巒――険しい山々。
○滃然――雲が盛んに立ち上るさま。雲は山から湧くものと考えられていた。　○車駕――天子の乗る車。
○千巖万壑――たくさんの険しい崖や深い谷。

問一　波線部a「固」b「竟」c「須臾」の読みを、それぞれひらがなで記せ。

問二　傍線部1「見下雲気如二群馬一奔突自二山中一来上」を、現代語訳せよ。

問三　傍線部2「飛二入吾車一」とあるが、何が誰の車に飛び入ったのかを説明せよ。

問四　傍線部3「名曰二貢雲一」とはどういうことか。説明せよ。

問五　傍線部4「如レ在二千巖万壑間一」とはどのようなことを言っているか。説明せよ。

問六　傍線部5「不三特可二以持贈一」を、書き下し文にせよ。

問七　傍線部6「併資二一笑一」とはどういうことか。本文を要約した上で、筆者の考えを一五〇字以内で述べよ。